

80歳以上の超高齢症例へのNST介入とその効果

伊賀市立上野総合市民病院 栄養管理課¹⁾ 薬剤部²⁾ 腫瘍内科³⁾ 外科⁴⁾
リハビリテーション課⁵⁾ NST⁶⁾

新谷実希^{1,6)}、奥川喜永^{3,4,6)}、白井由美子^{1,6)}、中井紘子^{1,6)}、久米麻有^{2,6)}、
猪田幸邦^{2,6)}、福森和俊^{2,6)}、正木健太^{5,6)}、田中光司^{3,4,6)}、田中基幹^{3,4,6)}、三木誓雄^{3,4,6)}

【目的】 80歳以上の超高齢患者における入院後早期のNST介入の効果を調査した。

【方法】 当院でNST介入した103症例を対象とした。介入一ヶ月間の栄養摂取状況の経時的変化と、入院後経過に与える影響を検討した。【結果】 男性37例、女性66例、平均年齢85歳、平均入院期間は64日である。NST介入後のエネルギー充足率は、介入日、2週後、4週後で経時的に改善した。またNST介入症例全体では、エネルギー充足率の改善は予後と関連しなかったが、80歳以上の超高齢症例群における介入2週後のエネルギー充足率の改善は、予後をも改善し、多変量解析で独立予後規定因子となった。蛋白質充足率もほぼ同様の傾向を示し、超高齢症例群のエネルギー充足率・蛋白充足率がNST介入二週間でともに改善した症例では予後も改善し、エネルギー充足率・蛋白充足率が独立予後改善因子となった。また入院からNST介入までの期間は、入院期間と正の相関を示していた。

【考察】 80歳以上の超高齢患者において、入院後早期にNSTが介入し、エネルギー・蛋白質充足率を向上させることは、予後を改善し、入院期間の短縮をもたらすと考えられた。